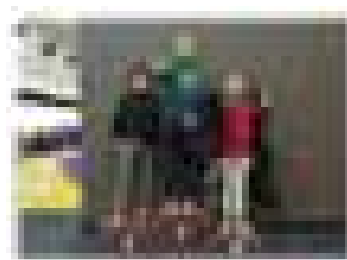
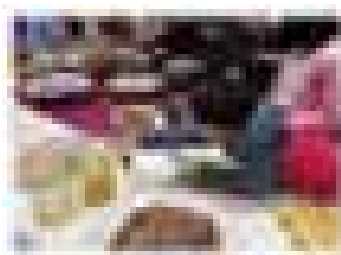


# 南山の風

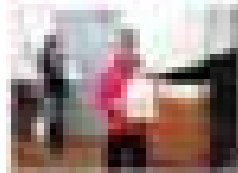
## 東山RC招待 施設対抗ボウリング大会

2月14日のバレンタインデーという素敵な日に、東山ロータリークラブの皆様方からボウリングの招待を受け、南山寮の小学生は星が丘ボウルに行ってきました。4施設対抗で行い、学年毎に個人賞もあり、俄然子どもたちのやる気に火が付きまして。ガーターなしのルールのおかげでどの子にもチャンスがあり、小さい子たちもボウリングの魅力を存分に味わうことができました。また、お昼には子どもたちが大好きなもののばかりが並べられたランチパイキングにお腹も満たされ大満足でした。



お待ちかねの結果発表では、チーム優勝は逃したものの、なんと個人賞ではほぼ南山寮の子どもたちが独占しました。他施設の子たちに少し申し訳ない気もしながらも子どもたちの活躍ぶりに胸を張りたいと思います。トップ賞に選ばれた子は照れながらもどこか誇らしげでした。惜しくも選ばれなかった子は来年のリベンジに向けてすでに闘志を燃やしていました。また、6年生は今年が最後ということでロータリーさんの粋な計らいで記念品をプレゼントしていただきました。

<1・2年男子の部> <1・2年女子の部> <3・4年男子の部> <5・6年男子の部> <5・6年女子の部>



子どもたちは、野球やサッカーなどは寮内のグラウンドでよく遊んでいます。しかし、ボウリングはそういうわけにもいかず、1, 2人ならまだしも十数人を連れて行こうと思うとそれなりに大変であり、年に数回行ければ良いほうで、子どもたちは今回の招待を待ち望んでいました。実際に、プレー中は子どもたちの真剣な顔、悔しがると楽しそうな顔を見ることができました。中でも印象的であったことは、ストライクを取った時にロータリークラブの方と子どもがハイタッチする場面です。力になりたいと思う者と力をかけてもらう者の双方の想いが通じ合った瞬間だと私は思います。東山ロータリークラブの皆様をはじめ、色々な形で南山寮を支援して下さっている皆様のおかげで子どもたちがたくさん経験をすることができず、成長できます、笑顔になります。そんな子どもたちの笑顔は私たち職員のみで温かくしてくれず、改めて支援して下さる方々のおかげで子ども・職員ひいては南山寮が支えられているのだと実感し、これからも私自身が感謝の気持ちを忘れずに、それを子どもたちに伝えていきたいと思っています。(文責: 2Fサブリーダー 北 雄二)

# 恵方に向かい無言で太巻きを頬張る！

2月3日は節分の日。数年前まで、この日は遅番の職員が「鬼」となり、子どもたちに豆をぶつけられる日でした。今年の節分は例年と様相が異なり、豆の出番はほとんどなく、静かな節分となりました。それもそのはず、フィリップモリスジャパン株式会社さんより、たくさんの「恵方巻」を寄贈していただいたため、子どもたちは「恵方」に向かって無言で太巻きを食べることに集中したのです。

そもそも、立春の前日に当たる節分に、一年の災いをはらうための厄落としとして豆まきが行われるのが日本の伝統的な習慣でした。西日本では恵方の方向を向いて太巻きを食べる習慣が昔からあったようですが、少なくとも愛知県にこの文化が根付き始めたのは平成になってからではないでしょうか。恵方巻を食べる文化が全国的に浸透したその背後には、食品関係の企業の戦略があったのかもしれませんが、そんな大人の思惑には関係なく、何と云っても食べることの好きな子どもたちは恵方巻にかぶりついていました。部屋の職員から恵方巻きの正しい食べ方のレクチャーを受けた子どもたちは、今年の恵方である西南西（名古屋で言うと荒子観音の方角）を向いて、無言で太巻きを頬張り、願い事をしていました。



# 屋外時計を設置できました！

～CBCチャリティ募金“こどもにぴたっ。受配”～

愛知県共同募金会様を通じて、「CBCチャリティ募金“こどもにぴたっ”」に受配申請をしていたところ、南山寮へ受配いただけることになったという嬉しいご連絡をいただき、昨年末、中部日本放送株式会社様にて目録贈呈式があり、出席しました。今回受配申請をさせていただいたのは、屋外時計設置のための施設整備費用で、シチズン製の屋外電波時計の購入設置費用として57万円をいただくことができました。

子どもたちは毎日園庭で元気に遊んでいますが、今までは屋外に時計がなかったので、なかなか時間を守ることでできない現状がありました。また、屋外時計を二面型にしたので、隣接する高齢者施設の利用者

さんやご家族、職員にも便利になるとおられます。

愛知育児院のロータリーに設置された高さ5mの屋外時計が、太陽光エネルギーを利用して正確に時を刻みながら、子どもたちの成長をずっと見守ってくれることになりました。CBCチャリティ募金のご寄託に心から感謝申し上げます。



# 中学卒業記念テーブルマナー教室

名古屋観光ホテル様より、中学3年生対象のテーブルマナー教室にご招待いただき、4名の中3児童が参加しました。中部善意銀行様が仲介の労を執って下さっていて、今回で9回目の開催となります。会場に向かう車中ではいつも通り快活だった子どもたちでしたが、ホテルに到着すると、普段は結婚披露宴、や大きなパーティなどで使われる大広間に通され、高い天井にキラキラと輝くシャンデリア、純白のクロスが眩しい丸テーブルに並べられたナイフやフォーク、会場に流れるオカリナのBGMという完全なるアウェイの雰囲気ですっかり飲み込まれ、緊張感でガチガチに固まっていました。テーブルマナー教室が始まると、丁寧な説明に従ってシルバーをぎこちなく動かしつつも、今まで口にしたことのない一流ホテルのフレンチのフルコースを堪能していました。南山寮のテーブルに同席いただいたのは、松坂屋の社長・会長を歴任され、名古屋商工会議所の会頭も務められた岡田邦彦中部善意銀行理事長。子どもたちに気さくに声をかけ、メニューの載っているフランス語を教して下さいました。



今回は、カレーハウス CoCo 壺番屋創業者の宗次さんから温かなメッセージが贈られ、宮道弁護士から危険ドラッグの怖さについてのレクチャーもありました。特に、宗次氏が語って下さった生育歴は現在の入所児童よりずっと苛酷なものでしたが、その口調は常にユーモアに溢れ、参加した子どもたちへの愛が込められた内容で、その話に真剣に耳を傾ける子どもたちの表情が印象的でした。



以下は、参加した子どもたちの感想です。

- ☆ 初めてのテーブルマナーでとても不安でしたが、ホテルやスタッフさんの雰囲気、おいしい料理、すごく楽しいテーブルマナー教室でした。
- ☆ 今回はテーブルマナー教室に招待していただき、ありがとうございました。はじめはすごく緊張したけど、料理がすごくおいしくて自分のためにもなりました。
- ☆ 自分が知らないマナーばかりで、楽しく学ばせていただきました。そして、なんと言ってもお料理、特に「熱々オニオングラタンスープ」がとてもおいしく、スープに焦がしチーズとは意外でおいしくいただきました。
- ☆ 将来社会に出るにあたって、とても貴重な体験をすることができ、とてもためになるお話なども聴くことができました。テーブルマナー教室で学んだことを今後に活かし、精一杯頑張りたいと思います。



<2月23日 中日新聞 朝刊>

# タキヒヨーさんご招待イベント

南山寮で、卒園、卒業、新入学を迎える子どもたちの声が響く一日。タキヒヨーさん主催のふれあいイベントを開催していただきました。ボウリングにバイキング、ワークショップと盛りだくさんで子どもたちはワクワクの中、楽しんでいました。

ボウリングでは、重いボールに悪戦苦闘する幼児さんと一緒に、おにいさんやおねえさんが投げる姿や、大人と張り合うほど上手に投げる子どもの姿など、成長した一面を見ることが出来ました。



エレベータで22階まで登り、タキヒヨーさんの会社にお邪魔しました。バイキング形式で食事をご用意して頂きました。タキヒヨーの社員の方々と交流しながら、お腹もちもいっぱいになりました。

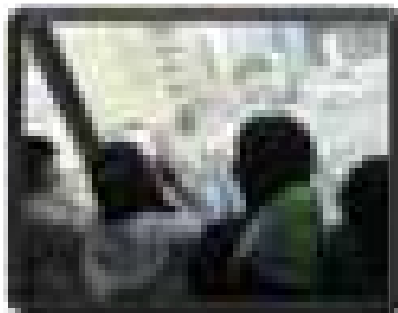


そして、プラ版作り、デザインハンガー、粘土細工、アクセサリ作り、新聞工作と時間が足りないぐらいの盛りだくさんのワークショップの時間。目移りしてしまいそうな中、好きなブースに飛び込む子ども達、「見て見て、これ作ったよ」と嬉しそうに教えてくれました。いくつものブースをわたり歩く子や、一つのワークにじっくり取り組む子と様々でした。タキヒヨーさんの社員さんと一緒に作ったキーホルダーやヘアピンをその場で嬉しそうにつけていました。

最後には、卒園式・卒業式にぴったりの洋服一式を頂きました。この服に袖を通して晴れ舞台に立つ子どもたちの姿が目につかびます。



これから、小学校、中学校に進んでいく子どもたちが今日の思い出を大切に、育てて行ってください。タキヒヨーさん、とても楽しい思い出をありがとうございます！！



# 特集 八事いりなかの今は昔…

## その12 八事杵中の昔ばなし ②

この八事杵中周辺には、何百年も前から伝承されてきた昔話や民話が残されている。その昔話は八事杵中という地域の歴史や風土に根差したものであり、郷土にとっては貴重な財産でもある。今回は、伊勝町に伝わる「へそまがりの息子」を紹介する。

「へそまがりの息子」 (伊勝町の民話)

昔、村にやぶの平太という医者がありました。

昔は医者と言えたいしたものでしたが、平太に限って言うと、あまり流行らない医者でした。たまに病人がやって来ると、難しい医学の本を聞いてわかったような顔をしていました。そしてしばらくすると、

「お前さんの病気は、この本には書いてない。この本にあるとおりの病気をしてきたら、ちゃんと治してやるわ。」と言いました。そんなふうですから、病人は治るどころではなく、悪くなっていきばかりでした。病院もだんだん流行らなくなってしまいました。

おまけに、村人との付き合いは一切せず、そしてこும்と思うくらい、物の出し惜しみをするのです。ただひとつ、お寺にだけは惜しまずによく寄附をしていたそうです。

医者には息子が一人いましたが、その息子もたいへんなへそまがりだという評判でした。あるとき、川に落ちて傷だらけになって這い上がって来たので、それを見た村人が

「大丈夫か。けがはないか。」と声をかけました。

「大丈夫。けがなんかしていないわ。」

「そりゃあよかった。」

「けがはなかったが、水を飲んだわ。」

「そりゃあいかん。どれくらい飲んだんだ。」

「そんなことわかるか。糞も糞もってないからな。」こんな調子で屁理屈ばかり言っていました。またあるとき、息子が縁側でひげぬきをしていると、医者が

「おい、それをちょっと貸せ。」と言いました。

ところが、医者がひげを抜こうとしても、先がかみ合わないので一本も抜けません。

「こりゃあ、だめだ。なんでこんなものを買ってきたんだ。」と言うと、

「先がかみ合わないことがわかっていたので、安く値切って買ったんだ。」と応えるのです。

またあるとき、外から帰る途中、にわか雨にあった息子を気の毒に思い、村人が傘を出してやると、

「なあに。これで、今夜は風呂に入らんで済む。」と言うのです。

さて、医者はだんだん歳をとり、いよいよ死に近づいたと悟って、息子をそばに呼んで頼みました。

「わしはたくさん病人を治してやったのに、わしが歳をとって動けんようになって一人も見舞いに来ない。お寺にもたくさん寄付してきたが、極楽からのお迎えも来ない。それでもまあ、わしはもうじきこの世とおさらばしなきゃいけない。わしが死んでも金は無駄に使うなよ。葬式なんかしなくてもいい。むしろに包んで燃やして、家の前の川に流せばいいぞ。」と言った。

「へそまがりの息子のことだから、立派な葬式をしてくれと言え、きつと粗末にするだろう。粗末にしると言え、立派な葬式を出してくれるだろう。」と考えて、わざと反対のことを言ったのだった。

ところが息子は、これが最後の親孝行だと考え、今までの罪滅ぼしに一度くらいは親の言うことを聞こうと、

「わかった。これまでは何から何まで反対をして、親を困らせたけれども、今度だけはせめてもの罪滅ぼしに言われた通りします。」と答えました。

それを聞いた医者はがっかりして、まもなく息を引き取ったそうです。

全日本仏教尼僧法団は、日本が敗戦からの復興を歩んでいた昭和26年、全国の各宗に散在する尼僧が手をつなぎ合って、世界永世平和記念万国殉難精霊追悼法要を日比谷公会堂で挙行了際、300名を超える尼僧により結成されました。全日本仏教尼僧法団は、豊かになった日本にもまだまだ恵まれない子どもたちがたくさん存在することを鑑み、仏教精神に基づいてなされる子どもの福祉の向上を目的とする事業に対し、「子ども福祉助成」を下さっています。南山寮は、平成25年度から子ども福祉助成金をいただいております。「中高生『山の家』」の運営資金として、活用させていただいております。子ども福祉助成は、ウィンタースポーツを通して、子どもたちに達成感・克己心・自己肯定感・他者への感謝の心を少しずつ醸成して下さっているのです。



コラム 南山隼人

「悪魔の兵器」廃棄完了を喜ぶ前に

防衛省は、自衛隊が保有していたクラスター爆弾を、すべて廃棄したと発表した。クラスター爆弾は、ひとつの爆弾の中に200個近い子爆弾が入っているもので、爆撃機などから投下されると空中で破裂し、子爆弾が広い範囲にばらまかれ、子爆弾の中には金属の破片などが仕込まれており、建物や人の身体を貫いて破壊する悪魔の兵器である。これまで、イラクやアフガニスタンで使用され、最近ではイスラエル軍が隣国レバノンにクラスター爆弾を投下。その被害者は世界で1万人以上。また、「不発弾」となった子爆弾が10万個以上も残っているとされており、地雷と同じように、半永久的にその力を持ち、人々を危険にさらすのだ。戦争が終わった後もクラスター爆弾の被害に遭つた人が絶えないのである。これが爆弾だとの教育を受けていない子どもたちが興味本位で触れて犠牲となるなど、深刻な被害に批判が高まり、5年前の2010年、クラスター爆弾禁止条約という国際的な条約が発効。日本もこの条約を批准し、陸上自衛隊と航空自衛隊が保有していたおよそ1万4000発のクラスター爆弾の廃棄を進めていた。

1998年、日本が対人地雷禁止条約を批准した際、自衛隊が保有していた100万個あまりの地雷について、国内のある有名な企業に委託し、滋賀県の処理場で爆破処理した。2000年、爆破処理の最初のスイッチを押したのは小淵恵三首相、そして2003年、最後の爆破処理の号令を下し、対人地雷廃棄完了式典を行ったのは小泉純一郎首相であった。廃棄処理にかかった費用は20億円。

地雷もクラスター爆弾も、その無差別性、残存性、残酷性から「悪魔の兵器」と呼ばれており、国が貯蔵していた地雷や爆弾を廃棄したのは喜ばしいことだ。廃棄処理完了が政府から発表され、ニュース報道されるのは、わが国が禁止条約を遵守し、条約で定められた廃棄期限までに廃棄が完了したことを広く国内外にアピールすることを目的としたものであることは理解できる。しかしながら、平和憲法を持ち、専守防衛を謳つた日本が、そもそも対人地雷やクラスター爆弾をいったい何のために保有しなければならなかったのか。どんな敵からの攻撃を想定し、どこに対人地雷を埋設する凶面を引いたのか。どこにクラスター爆弾を空爆する計画を想定していたのか。謎や疑問は深まるばかりだ。

クラスター爆弾の廃棄の大部分は、ノルウェーの会社に委託され、ノルウェーとドイツの廃棄処理場へ輸送しての処理が完了したのだが、その費用はなんと14億3千万円だといふ。なお、1983年以来、防衛省が購入したクラスター爆弾の総額は276億円。クラスター爆弾とともに消えてしまった290億円のお金を、子ども・子育てに使ってくれていたら、子どもたちの現在、そして未来は、どれほど明るいものとなっていただろう。(リョウチヨウ)

平成27年 3月号

(月刊：毎月1日発行)

<明治19年10月 第三種郵便物無認可>

発行：社会福祉法人 愛知育児院  
児童養護施設 南山寮

編集責任者： 施設長 山田 勝己

〒466-0835 名古屋市昭和区南山町5番地

TEL (052)831-3750 FAX (052)835-7483

e-mail: [nanzanryo.1909@space.ocn.ne.jp](mailto:nanzanryo.1909@space.ocn.ne.jp)